



トウモロコシの芽の数を研修員と一緒に英語で数える。「英語の勉強にもなっているね！」

高校生が盛り上げる 十勝の農業

日本の農業の未来を担う若者たちが集う
北海道帯広農業高等学校。
漫画『銀の匙 Silver Spoon』の舞台にもなった
この学び舎を訪れたのは、開発途上国の研修員たちだ。

十勝の自然を生かした 農業高校

「そのメジャーの端っこ持って」

「one, two, three, four...」

五月晴れの空の下、一面に広がるトウモロコシ畑。500メートルは続いているだろうか。整然と立てられた畝に沿って、小さな緑の芽が並んでいる。その数を数えているのは、北海道帯広農業高等学校の生徒と開発途上国から来た研修員たちだ。

全国第一位の農業生産高を誇る北海道。帯広市を含む十勝平野は、その中心地だ。ここで、未来の「農業人」を育て

ているのが同校。実はこの高校、地元だけでなく、日本の農業高校の中でも群を抜いて有名。漫画『銀の匙 Silver Spoon』のモデル校になっているからだ。全国から「農業を学びたい」という熱い思いを持つ高校生が集まっている。

「公立高校の敷地内で、ここまで本格的に農業実習をしているのは驚きです」。そもそも、農業を専門とした高校自体が途上国では珍しい。エチオピアのオロミア州農業局のアハメッド・ウメールさんは、何ととってもその規模に驚いたようだ。

この研修のテーマは「地域住民が主導する農業」。農業普及員の力に頼ること

なく、農家の人々が地域ぐるみで農業に取り組めるような仕組みを学ぶ。「農業高校は人材育成の場であると同時に、コミュニティが情報共有する場としても重要です」。そう説明するのは元校長の水戸部洋二さん。この研修の企画・運営を帯広畜産大学と協働で担当している講師の一人だ。

「種をまいたのは2週間前ですが、もうこんなに芽が出ていますよ」。酪農科学科の織井恒先生の指導を受けながら、1メートルの間にいくつ芽があるかを数力所で数えて、畑全体の芽の数を割り出していく。「あれ、ここは50個なのに、こっちは55個ある」「機械でまいていても、必ず全て均等にいくわけではありません。結局は人の目が大事なんです」。織井先生の言葉に、生徒も研修員たちもうなずく。

みんなで育てる 地域の農業人

トウモロコシ畑から10分ほど歩くと、ビニールハウスが並んでいた。「トマトにきちんと栄養が行き渡るように、余分な葉を切っているんですよ」と水戸部さん。

その隣のイチゴ畑でも、生徒と研修員が雑草の処理をしていた。

「アフリカでもイチゴを栽培しているのですか？」

「ビニールハウスは使っていますか？」

作業中もさまざまな質問が飛び交う。

今回、参加した研修員は14人。出身国は、アフリカからアジアまでさまざま。

「日本と他の国では農業のやり方が全く違うんだなあ。研修員たちと話しながら、生徒たちはいろいろな発見があったよう。」「アフリカには水道が通っていない地域もたくさんあると聞いて驚きました。その中で農業をするのはとても大変だと思えます」と、2年生の浅井共恵さんは話してくれた。

収穫時期は通常7月、トマトもイチゴもまだ青いままだ。「あと1カ月ちょっと

もまだ青いままだ。「あと1カ月ちょっと

もまだ青いままだ。「あと1カ月ちょっと

世界とつながる 教室

作業服と長靴姿で、トウモロコシ畑と一緒に作業する高校生と研修員。お互い慣れない英語と日本語で一糸懸念コミュニケーションを取っていた



「日本のビニールハウスは便利だなあ。それにしても暑い！」。国は違っても農業にかける思いは同じ。その表情は真剣そのものだ



白い花をつけたイチゴはまだ青い。「これ、雑草だよな?」。一つ一つ確認しながらの作業だ



赤くなったトマトを味見。「味がしっかりしていますね」と、ブータン農業森林省のナワングさん(右)とカンボジア農林水産省のトゥラ・ハイさん

とで収穫できるんだけど...」。しかし、そこに一つ、赤く光るトマトが。せっかくなので試食してみようと、貴重なトマトをくし型に切って生徒が持つてきてくれた。「うん、甘くておいしい!」。みんなが顔をほころばせる。

「農業を通じて他の国の人たちと交流できるのは楽しい」。そう話してくれたのは、積極的に英語で会話をしていた2年生の老木麻結さん。将来は、自分でチーズのブランドを立ち上げるのが夢というから頼もしい。

農作業の後は、水戸部さんと織井先生を交えて研修員からの質問タイム。「みんな規律正しくて驚きました」。マラウイ農業食料安全保障省のビトウリス・ザガワさんは、生徒たちの作業中の態度に感心したよう。これに対して織井先生は、こう話してくれた。「早朝の農作業は1年生が担当するので全員寮に入ります。夜も消灯前に携帯を全て回収するんですよ」。それを聞いて研修員たちも納得。「農業高校をすぐに造ることは難しいけれど、コミュニティごとに子どもに農業技術を教えるイベントを開くなど、全世界を農業に巻き込む工夫ができれば」と、意欲を見せていた。

「北海道の農業はまだ歴史が浅く、私たちもこの地域に本当に合った農業のスタイルを模索中です。いろいろな国の人たちと農業について話すのは、生徒たちにとって良い経験になるはずですよ」と織井先生。十勝の大地が育む未来の農業人たちが、途上国と日本をつなぐ懸け橋になってくれるだろう。